

W・H・ウォルシュ著

神山四郎訳

『歴史哲学』

「歴史哲学」とは何か。それは先験的な原理を前提として人類史の全コースを演繹し、その目的を設定する観念的な構築物だと一般に考えられており、観念的・哲学的であるが故に堅実な実証史家には敬遠され無縁なものであると思われてきた。この人間の過去の行為の総体 *res factae* の哲学的考察としての歴史哲学が、歴史の実際問題を扱う歴史家にとって無縁で敬遠するに値するものかどうかは措くとして、著者ウォルシュが主として取り扱うのは、歴史的思考の論理の問題、即ち歴史学（あるいは歴史叙述・歴史研究・歴史科学）*historia rerum gestarum* の哲学的考察の事なのである。

「歴史という言葉は、(a)人間の過去の行為の総体と、(b)それを現在我々が構成した

叙述または説明にあたる。この両義性は、それがすぐさま歴史哲学のために二つの可能な研究分野を開くから重要なのである。……（中略）……そして明らかにその二つのどちらを選ぶかによって内容はまるで違ってくる。」（本書九頁―十頁）。今、(a)を「過程としての歴史」(b)を「構成としての歴史」と名付ければ、ウォルシュは「過程としての歴史の哲学」を「思弁的歴史哲学」、「構成としての歴史の哲学」を「批判的歴史哲学」と呼ぶ。

第一章で歴史哲学という主題をこのように整理した上で、第二章から第五章までは批判的歴史哲学の諸問題が、第六章から第八章までは思弁的歴史哲学が論じられる。

第二章では歴史と科学の関係が問われる。科学の共通概念と科学的知識の主な特徴は、(1)組織的に達成され体系的に相互関連している事、(2)一団の一般の真理から成っている事、(3)予測を的中させたり、事態をコントロールできる事、(4)個人的な好みや私的事情を越えて認めうる客観性を持つ事の四点にまとめられる。これに対して歴史の知識を考える時、そこには古くからの対立する見解がある。一方は歴史は個別化という

認識志向を持った個別的真理の知識、具体的な科学であり、その本質的な関心事が人間精神の行為と経験にあるため、同感的理解という方法が適用されるとする「観念論者」であり、他方は、歴史も科学と同じ基本的方法に依っているとする「実証主義者」である。ウォルシュの結論は、歴史的思考や歴史家の主要関心の点では観念論者に傾き歴史は科学ではないとするが、方法の点では理解を否定し実証主義者に近づく。

第三章では観念論者の代表コリングウッドの「理解」による説明が詳細に検討される。コリングウッドは歴史の対象が、自然的現象でもなく、衝動的で無反省な行為でもない、過去の人間の合理的な思考であり、それが合理的であるので歴史家の再思考による理解を可能にする主張する。ウォルシュはこれを不十分だとし、「総合」による説明を提示する。歴史家は歴史的事件事件を運動や一般の傾向にまとめ上げ、個別的事件をその手段、一表現として目的論的あるいは準目的論的に説明する。この説明が歴史の説明の重要な部分を構成する事が示される。

第四章では真理についての二つの哲学理

論と、歴史の真理・事実の関連が問われる。歴史の知識の基礎として役立つ揺るぎない一連の事実が存在しないとしながらも、史的懐疑論を慎重に避けて、歴史の事実の特殊的性格が語られる。

第五章では歴史の客観性が問題となる。歴史家の間の不一致は、(1)個人的偏見、(2)集団的偏見、(3)歴史解釈の理論の対立、(4)その底にある哲学(世界観)の対立から生じる。(1)と(2)は重大な障害ではなく十分懐疑的事実によって免れ得るものだが、(3)と(4)は歴史家の観点であり、客観性によって越え難い障壁をなす。ウォルシュは結論を保留しながら色々な観点を総合する可能性、ある観点を別の観点に包み込む可能性について述べる。

第六章から第八章までは思弁的歴史哲学が扱われる。具体的には第六章でカントとヘルダー、第七章でヘーゲル、第八章でコント、マルクス、トインビーが簡単に触れられる。歴史に計画やパターンを見出す企てに対して、歴史とは何の関係もないとか、形而上学的で非科学的だと批判するのは易しい。だが一般に我々は歴史に道理が具象化されているに違いないという期待や、歴

史には何らかの意味があるはずだという感じを多かれ少なかれ持っている。このような企てが繰り返され、主題として存続しているとウォルシュは指摘している。

全体として、ウォルシュの論の進め方は、様々の対立する主張を織り込みながら、自分の主張を極力抑えつつそれらを批判・検討していき、ポイントに来れば歴史研究の実際に立ち戻って考えるという方法をとっている。それは入門書という性格もあるが、彼がオックスフォード派の言語分析の手法を駆使して歴史研究の実際から論点の整理を行っているからである。そのため、歴史家にとってその内容を身近なものにしていくのが本書の何よりもの特長であろう。本書末には邦語文献、邦訳書を追加補充した親切な「参考文献」と、簡便な紹介である「訳者あとがき」が付されている。訳は多少問題とする点があったが、全体的には内容に忠実で読み易い文章であった。最後に「訳者あとがき」から。

「今ではもう歴史哲学は形而上学者の独占物ではなく、史学者にとって無縁のものではなくなっている。」是非乞御一読。

(四六判 二四二頁 一九七八年十二月)

創文社歴史学叢書 一八〇〇(円)
(芝井敬司 京都大学大学院生)

N・コーン著

江河 徹訳

『千年王国の追求』

原著は N. Cohn, *The Pursuit of the Millennium: Revolutionary Millenarians and Mystical Anarchists of the Middle Ages*, Paladin 1970 である。初版は一九五七年に刊行された。翻訳の底本に用いられたのは、全体にわたって加筆修正された第三版である。原著はすでに、中世異端運動の承譜と眺望についての知識を得るのに手頃な概説書、入門書として、関連課題に携わる研究者の間で利用されてきた。

本書の対象は異端運動全般ではなく、千年王国運動に限定される。扱われる時代は八世紀から十六世紀に及ぶ。主な運動を列挙しておく。十字軍運動の影響を受けた諸《民衆十字軍》、偽ボドヴァン、偽フレデリック、意図せずして千年王国説の理論的支柱となったヨアキム、十三世紀以来、各国に出現した鞭打苦行運動、フランシスコ会